様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2009～2011
課題番号：２１６５２０３２
研究課題名（和文）　東北アジアにおける西欧受容―フランス受容を中心に

研究課題名（英文）　Reception of the Occident in general and of France in particular in the North East Asia

研究代表者
恒川　邦夫（TSUNEKAWA KUNIO）
一橋大学・名誉教授
研究者番号：60114956

研究成果の概要（和文）：東北アジアにおける西欧受容の在り方について、中国・韓国の大学を歴訪し、意見交換して知見を深めたこと。それによって我が国の西欧言語教育の在り方を見直し、かつ、将来の同地域における人的交流や資料交換のためのネットワーク作りを急ぐ必要を感じた。ただし韓国の大学は形態・教育内容ともに日本に似ているので問題ないが、中国は国の監視が厳しいのと、教育が実学に偏向しているので、交流は当面専門家間のものに限定されるだろう。

研究成果の概要（英文）：Due to the visits to major universities of China and Korea, I got a better understanding of the reception of the Occident in the North East Asia. As a result, I felt an urgent need to review our country's current program of occidental language education and to make a network of researchers and relevant documents in this part of the world. However, if between Korea and Japan, we don't see any particular obstacle in doing so, because our school systems as well as educational contents are similar, with the continental China, it will be different. Chinese universities are under the strict control of the Government, not yet enough open and free to the external world, so that for the moment, exchange should be limited to that between specialists on individual level.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	800,000	0	800,000
2010 年度	700,000	0	700,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,200,000	210,000	2,410,000

研究分野：仏文学、仏語圏文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）
キーワード：西欧受容、異文化交流、外国語教育、フランス文学、仏語圏文学、中国の近代化、韓国の近代化、日本の近代化

１．研究開始当初の背景

明治維新からおよそ 140 年の歳月が経ち、その間、二度の世界大戦があり、冷戦構造に終止符が打たれ、経済のグローバル化が進み、世界は大きく変貌した。そうした中で、高等教育における外国言語文化の摂取の在り方についても根本的に見直す必要があるのではないかと思われた。明治維新にさかのぼって考えれば、西欧列強の言語文化の摂取は「近代化」の同義語であった。外国言語文化

の摂取の在り方を見直すとすれば、ひとまず「近代化」を成し遂げ、経済・技術大国の仲間入りをした今、「近代化」の次に掲げるべきあらたな目標を設定することであろう。しかし、その点に関しては本当の議論がなされないままに、なしくずし的な改革とそれに対抗する保守的な反改革に終始してきたのが現実ではなかろうか。

２．研究の目的

「近代化」と「西欧受容」の在り方を、東北アジア（日本、韓国、中国）における外国語教育の現状を通して、具体的に知ること。その知見に基づいて、外国言語文化の摂取に関する近未来の展望を描いてみること。

３．研究の方法

「近代化」と「西欧受容」の在り方は実際は多岐にわたる大きなテーマなので、フランスの言語文化の教育の現状を具体的に調査することから始めることとした。そのために（１）韓国と中国の主要な大学を訪問し、仏語科の教員との意見交換を通して、基礎的な知見を得る、（２）授業参観、学会の見学を通して、より具体的な知見を得る、（３）教科書、教員の論文、翻訳などの資料を収集する、（４）韓国、中国の近代化の歴史を文献資料に基づいて調査し、背景となる歴史的な文脈・政策に対する理解を深める。

４．研究成果

１．以下に列挙する成果を得た。

（１）　韓国：ソウルにある五大学（国立ソウル大学、成均館大学、慶熙大学、淑明女子大学、梨花大学）を訪れた。仏語は韓国の大学で教えられている欧米言語の中で英語に継ぐ第二の勢力を持つ言語である。教員のプロフィールは日本の外国語教員のそれと類似している。フランスへの留学経験を持ち、文学や言語に関する研究論文で博士号を取得しているものが大部分である。教員になってからも、昇進のためには、毎年、数点の論文の提出が義務付けられている。学会は文学・言語関連の組織だけではなく、芸術・文化などの分野の組織が持ち回りで開催母体となって開く合同学会である。これは一義的には規模の問題であるが、我が国でも仏語仏文学の教員・研究者の数が減少する傾向が続くならば、将来このようにフランス文化全体に関わる研究者の合同学会を組織する道もあることを示唆しているように受け止めることもできるであろう。しかし韓国の外国語教育が実用的な言語運用に力点をおくよりも、文化的な内容を重要視している点において、日本とよく似ている。また韓国の仏語教員の中には、日本の研究者ないしは研究グループと交流しているものが、少なからずいることも確認できた。

（２）　中国：北京、天津、上海、武漢、南京の主だった大学（北京大学、北京外国語大学、北京語言大学、首都師範大学、天津外国語大学、復丹大学、南京大学、武漢大学、華中師範大学）の仏文科を歴訪し、教員と意見交換して、有益な知見を得た。その結果次の点が中国における外国語教育の特徴であることが分かった。

①　外国語を学ぶ者は大学の中に設置されている外国語学院に所属し、4年間選択した外国語の習得に特化したカリキュラムに従って、外国語の実用的な習得に専念する。三年時の終わりに検定試験を受けて、それにパスしなければならない。聞く・話す能力に力点が置かれているので、卒業年度まできた学生の言語運用能力はかなり高い。授業は習得言語（英語、仏語など）で行われる。学部生のレベルで日中を比較すると、教養・文化的知識を度外視すれば、中国人学生のほうが勝っている。

②　実用的・実戦的な外国語の運用能力を身に付けることが大学における教育の目的になっていることは、中国の大学が就職に有利に働く技能を身に付けさせ、免状を出すことに存在理由を見出している証拠であり、日本のように高度な＜教養主義＞を標榜していないことに由来する。そして、事実、高度成長期にある中国では、中国国内に進出してくるフランス企業（自動車、食品、スーパー、化粧品、奢侈品など）による雇用、公用語がフランス語であるアフリカの資源国への派遣要員など、社会のニーズが相応に存在している。

③　しかし同時に教員採用のレベルでは、しかるべき格の大学に採用されるためには「博士号」を取得していなければならない。しかし中国の大学でフランス語の博士課程を設置している大学は数えるほどしかない。したがって、ここには大いなる矛盾が生じている。学部では文学・思想など研究者として将来必要な＜教養＞はごくおざなりにしか教えられていない。またそれを教えられる教員もほとんどいない。したがって、修士課程、博士課程をめざすためには、限られた大都市の有名大学を狙うほかないが、それは非常な狭き門である。中にはフランスの大学へ留学し、本格的な博士論文をフランス語で書いて戻ってくるような例外もあるが、現状は、大学で現在教えている講師（20代後半から30才前後）がどこかの大学の博士課程に登録し（もちろん試験に通らなければならない）、教え

ながら、博士論文を準備して、将来に備えているような例が少なからずある。中国の大学は中央の教育部（文部科学省に相当）が直轄するエリート校とそれ以外の＜私立＞校に分かれているが、大学の名に値する研究の母体となるような大学は、中国広しといえども数えるほどしかない。将来それがどのように変貌するかは、今後の課題であるが、隣国の日本との関わりを展望する際にも、そのことを視野にいれておく必要があるだろう。

（３）　東北アジアにおける未来展望：以上の現状を踏まえると、東北アジアにおける外国語教育に関する未来展望として、次の諸点を指摘することができるだろう。

①　我が国の大学における外国語教育の質を向上させるためには、一つの言語を技能として四年間にわたって習得する学生を募集すること。一クラス三十名として、二年間は聞く・話す能力をのばし、三年目に読むことを教え、四年目に書くことを教える。この方式は中国方式と日本方式を合体させたものである。一般教養としての外国語という枠を残すとしても、この一クラス三十名は志望と選抜による特別専攻とする。このクラスは副専攻として経済・法律・社会学などを選ぶことができるが、それらもすべて選択した外国語を通して行う。

②　日本の西欧研究の蓄積は、東北アジアにおいては例外的な高水準にある。また原典資料の整備も公的な図書館および個人の蔵書などによって、行き届いている。これを一つの有用な資源として、日・中・韓でのアカデミックな交流に活用すること。中国の外国語教育において、欠落している部分は研究者の数が少ないこと、および、原典資料が大学の図書館にほとんど存在しないことである。日中の教員間の交流が盛んになれば、過渡的には、日本の教員が中国の大学の修士課程や博士課程で教えることも可能であろうし、原典資料で日本では廃棄の憂き目を見るような退職教員の＜財産＞の再利用の可能性も出てくるだろう。

③　さらに長期的な展望に立てば、次のようなことが言えるだろう。二十一世紀初頭の世界は多くの紛争に満ちている。ソ連のペレストロイカ、ベルリンの壁の崩壊、冷戦構造の終焉。かくして二十世紀の最後の十年間は新秩序の模索に明け暮れたが、近年は＜アラブの春＞の動乱が続くなか、世界はまだ新たな道を見出していない。そうした中で、超大国をめざす中国のめざましい経済成長があり、韓国経済ももちなおして、東北アジアは世界経済の第二位と第三位が隣接する位置にあり、今後の世界の方向を牽引する力が期待されている。この地域が紛争の地域になるか、共存共栄の地域となるかは、世界の和平を左右する大問題である。そのために何をしなければならないか。言うまでもなく、二次大戦の傷跡を乗り越えて、経済的交流にとどまらないより深いところでの交流をこの地域の知識人たちが実現することである。現在猛スピードでかつ未曾有の規模で進行している中国の＜近代化＞は西欧資本主義の模倣である。古い物が見境いなく壊され、その廃墟の上に欧米型のビルが建造され、生活スタイルは急速に欧米化していく。その速度と歯止めのかからなさは恐ろしいほどである。一歩先に同じ道を歩んだ日本人から見ると、そこにはさまざまな負の側面も含めて、＜いつか来た道＞感覚、既視感覚に溢れている。しかしこれでよいのか？これほど無反省に欧米の模倣につきすすんでよいのか？欧米モデルは、欧米ではすでにさまざまな障害・害悪を生み出し、欧米人自身の中から反省の声があがっていないか？金融資本主義一本槍の道をつきすすんだ果てには＜破滅＞が待っているのではないか？すでに中国人の若い世代から、そのような声があがって来ている。東北アジアは深いところでつながっている。古代中国が生み出し、今日にいたるまで、さまざまな変貌を遂げながら伝承されてきた＜中国哲学＞が生み出した知恵が共有されている。現代世界を支配している＜グローバリゼーション＞理論に対抗するあらたな＜道＞を東北アジアが一致協力して提示すべきではないのか。それには中国哲学をより深く、より根源的に欧米に紹介する努力を西欧研究に従事し、その言葉や思想の理解につとめ、東北アジアに紹介する仕事をしてきた者たちが協力してあたるべきではないか。それが今回の研究が示唆した大きな成果である。

④　以上に述べた成果を今後につなげる具体的な提案を以下に列挙する。

ｉ同じ作家、同じ作品、同じ主題を研究する日本・韓国・中国の研究者たちの連携を深める。当初は手探りでも、我が国である程度以上の規模のシンポジウムや研究会を持つ際には、隣国（韓国・中国）の研究者を捜し、参加を求める（可能ならば招待する）。

ii 学会レベルでの交流・連携を深める。現時点では中国との連携は、政治的な理由から歯止めがかかり、容易ではない。中国のフランス語教師の学会は、フランス外務省の予算で、年一回、場所を変えて行われている。中国政府が関与するのは各大学の科長が招集されて行うもので、行政面での指導であり、研究とは無関係

である。したがって、当面は、中国側に、研究者の交流を呼びかけ、少しずつ輪を広げていくのが穏当であろう。
iii 学術交流の一環として、授業・講義・ゼミナールなどへの相互乗り入れも考えられる。日本と韓国は素地が似ているので、大きな問題はないが、中国との間では同じレベルでの相乗りよりも、語学教育のレベルで中国人教師が力を発揮するとすれば、日本人教師は文学・思想のレベルで中国の大学で教鞭を取ることが出来るのではないか。双方の長所を取り入れながら、交流することで、意思の疎通がはかられ、より建設的な提案が双方からなされることが期待できる。そしてそのような交流を通して、②で述べたような資源の活用がなされ、東北アジアの根底に共通に流れている思想を欧米へ発信する共同作業が推進されるのではないかと期待される。
iv 今後期待されるのは、欧米思想の紹介・追随ではなく、より発信型のメッセージを打ち返すことである。そのためには、地域的な連携が不可欠である。西欧受容の担い手が同時に東北アジアの言語のすべてに通じていれば理想的だが、でなければ連携して補完的になる必要があろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）
①恒川邦夫、詩が生み出すのは衝撃である―グリッサンという≪存在感≫、現代詩手帖 4 月号、査読無し、2011、50-51

②恒川邦夫、エドゥアール・グリッサン追悼、すばる 6 月号、査読無し、2011、246-260

③恒川邦夫、ヴァレリーの≪早熟≫あるいは≪エロス・エネルギュメーヌ≫、三田文学 2011 年夏季号、査読無し、2011、118-119

④Kunio TSUNEKAWA, *“ Mirror of the West” : a critique and a plea*, in Paul Gifford & Tessa Hauswedell(eds.) Europe and its Others—Essays on Interperceptions and Cultural Identity Studies, Peter Lang、査読有り 2011、277-289

⑤恒川邦夫、清水徹著『ポール・ヴァレリー―感性と知性の相剋』書評、ふらんす 85 巻 6、査読無し、2010、75

⑥恒川邦夫、巨大地震に見舞われたハイチの≪文芸≫と≪復興≫、すばる 5 月号、査読無し、2010、182-192

⑦恒川邦夫、ハイチの≪文芸≫と≪復興≫その２―≪奥深い≫ハイチへの眼差し、すばる 7 月号、査読無し、2010、160-166

⑧恒川邦夫、《クレオール》列島、ふらんす 84 巻 3－12、査読無し、2009、見開き 2 頁

⑨ Kunio TSUNEKAWA, Relire Ainsi parla l’Oncle au tournant du nouveau siècle, Mémoire d’encrier, Canada、査読無し、2009、415-419

〔学会発表〕（計３件）
① Kunio TSUNEKAWA, Les journées Paul Valéry, Présence de Paul Valéry au tournant du XXIe siècle, le 24 septembre 2011, Musée Paul Valéry, France

② Kunio TSUNEKAWA, Africa, through Literature & Cultures, « Négritude» et après, Hankuk University of Foreign Studies, le 30th October 2010, South Korea

③恒川邦夫、日本フランス語フランス文学会、≪クレオール≫の虚実―表看板と内紛、熊本大学、2009 年 11 月 8 日

〔図書〕（計４件）
①恒川邦夫、松田浩則他、筑摩書房、ポール・ヴァレリー集成 VI、2012 年、500（11-22）

②恒川邦夫、思潮社、≪クレオール≫な詩人たち（上）、2012 年、336

③恒川邦夫、筑摩書房、ポール・ヴァレリー集成Ｉ、2011、525

④恒川邦夫、岩波書店、「精神の危機 他 15 篇」、2010 年、518

６．研究組織
(1)研究代表者
恒川　邦夫（TSUNEKAWA KUNIO）
一橋大学・名誉教授
研究者番号：６０１１４９５６